初教 KAWARABAN かわらばん

第3号
2001.6.22
広島文教女子大学
教育学会
発行

バラの花考

学科長　金舛　俊作

薔薇ノ木ニ／薔薇ノ花咲ク
ナニゴトノ不思議ナケレド。

この詩は北原白秋の詩である。極めて単純明快な詩である。しかし、繰り返し読んでみると何と味わいのある詩であろうか。バラの木にバラの花が咲くのは極めてあたりまえのことであり、何の不思議もないことである。バラの木にボタンの花が咲いたり、ツツジの花が咲いたとしたら、これは大変なことである。毎年5月頃になると、きまってバラの花が咲く。これを「あたりまえ」と考えたのでは、この詩は何の感動も与えないのである。「どうバラの木にはバラの花しか咲かないのだろうか？」こういう素朴な思いがこの詩にこめられているのである。

さて、「薔薇」という言葉に「自分」という言葉を置き換えてみたらどうだろうか？「自分ノ木ニ／自分ノ花咲ク、ナニゴトノ不思議ナケレド」となる。この詩は、はたして「あたりまえ」と言えるだろうか。

自分という一人の人間はかけがえのない存在である。私達は日々の生活の中で、自分という人間を大切にして生きているだろうか。自分らしさを発揮して勉学に、あるいは仕事に打ち込んでいるだろうか。いわんや自分らしさ、自分のよさに気付き、自分というかけがえのない「木」に精一杯の花を咲かせるべく努力しているだろうか。美しく咲き誇っているバラの花を観て自問自答する今日この頃である。

初等教育学科を卒業された皆さん、学生の皆さん、今年は「2001年」という意義ある年です。「自分」という人間を見つめ直し、新たな「自分づくり」に向けて歩もうではありませんか。美しい「自分」の花を咲かせるために。

'01.3第17期生卒業祝会のワンコマ

突撃レポート！「公民館主事は今」

財団法人広島市ひと・まちネットワーク
安佐公民館　主事
山田悦子さんを訪ねて

［突撃レポーター　田頭　岡］

今回の突撃レポートは、初教十四期生（国語専修）の山田悦子さんです。山田さんの声も沢山取材させてもらいました。が、公民館長さんのお話もとても印象深かったのです。むしろそれを中心にしてお伝えした方が、山田さんの仕事ぶりがよくおわかりいただけると考え、以下、まとめてみた次第です。

五月半ば、いいお天気の土曜日。編集長と副編集長の二人で、安佐町飯室にある安佐公民館にお邪魔しました。正午頃、安佐公民館に到着。中川紳一館長さんと共に出迎えていただきました。事務所で、さっそく館長さんにお話をうかがいました。

「いやー、彼女は、広島市内でも有名人ですからねえ。」と、館長さんはきり出されました。「山田主事は、とにかく発想・企画力がすごいです。スタッフをぐいぐいと引っ張ってくれていますよ。次々と行事も提案してくれます。例えば去年やったんですが、子どもたちが太田川に親しむという講座。もう大好評！他にも、地域の小中学校と連携しながらの活動もしています。そのコーディネーターとして、山田さんは飛びまわっています。交渉や調整がうまいんですよ。」

ここで、レポーターのコメント。山田さんは、学生時代から精力的にボランティア活動に取り組んでいました。特に野外活動関係は、群を抜いて経験豊富。そして、初教での学びをフルに生かし、学校の先生・子どもたちとのお付き合いもうまくやっているのです。地域の方々との交流についても同様です。

中川館長さんのお話は続きます。「公民館主事は、ありとあらゆることをしなければなりません。彼女は、それを実にできばきとこなしています。そして、地域の人に、自然に声をかけられる人です。だから、地域の人の声を集めることが上手。吸い上げてくれます。だから、いい活動を組めるわけです。」

しばらくすると、山田さんが入ってきて、「みなさん、お食事の用意が出来ましたので、どうぞあちらへ。」と案内してくれました。その日は、山田さんが責任者をつとめている「ふるさと花木マップ～地域の草花は魅力いっぱい～」の活動の五回目・最終回ということで、マップ完成発表会と野草料理づくり・試食会が行われていたのです。部屋に入ると、なんと野草料理フルコースが並んでいるではありませんか！参加者の輪に入れていただき、旬の味を堪能させていただくと同時に、発表を聞かせていただきました。

山田さんは、終始なごやかに活動を取りしきり、講師の先生・老若男女の参加者の引き立て役をつとめ、立派な仕事ぶりでした。山田さんは、最後に私たちに語って